

## 発達 15 (308~315)

座長 内田伸子・丸野俊一

- 308 メタ・コミュニケーションに関する発達の研究(1)  
 309 メタ・コミュニケーションに関する発達の研究(2)  
 ——メタ・コミュニケーション能力と伝達方略との  
 関係——  
 九州大学 ①丸野俊一  
 ②古城和子  
 大阪大学 小窪輝吉
- 310 幼児の報告課題における計画的構成  
 ——生活発表における話題構造の分析より——  
 東京大学 松尾春代
- 311 Referential Communication における聞き手としての  
 の役割取得について  
 愛知県立大学 神田直子
- 312 乳児院と家庭の子どもの発達の差異の検討(1)  
 ——言語及び要求行動——  
 国際基督教大学 佐藤よしみ
- 313 幼児の伝達行動  
 ——母子間電話会話の分析——  
 名古屋大学 村上京子
- 314~315 幼児初期の遊びにおける会話の構造(1)(2)  
 ——2才児TV番組研究(J)——  
 ——2才児TV番組研究(K)——  
 お茶の水女子大学 ①内田伸子  
 聖心女子大学 ②無藤隆

本教室での発表内容は、310、313、314、315に代表されるように日常生活場面での諸現象に関する研究が主流であった。そのためアプローチの方法、サンプルサイズ、実験室的研究に対する反省などに関する諸問題が論議の中心となった。まず簡単に質疑応答を述べると、

309 無藤のクラス課題での有効性もメジャーとしては聞き手の選択により得点化した方がよいの質疑に対し、メジャーの有効性の問題はあがるが、ここでは伝達方略の差異の分析に興味があるとの回答があった。310 丸野の話者は実際体験と見聞体験の区別ができていないかの質疑に対し、できているとの返答があった。312 高橋(国立音大)からの、①乳児院と家庭との物理的環境の差異のおさえ方、②テスターと子どもとの関係の把握、③少数例をもって環境差を指摘することの危険性についての質疑に対し、①語彙検査や要求行動などの指標で、②保母がテスターになることは困難、③同月齢などで数多くのサンプル数をそろえることは困難との答えがあった。それに対し、内田より①保母制度の差異、大人

と子どもの比率、大人との接触度、interaction の暖かさといった社会的環境や玩具使用の自由さや遊び空間の広さといった物理的環境の指標もある、③異環境乳児院を数ケースずつとり MCC ベビーテストなどにより個人差の指標との関連でみた方がよいとの助言があった。

313 田島(北大)より電話を媒介にした時のメリットとデメリットは何かに対し、電話は子どもにとってファミリーであり、伝達行動が起りやすいとの回答があった。

314 高橋(国立音大)よりプレイルームの制約条件から遊びの種類が規定されているのではないかの問に対し、確かにその面はあるが、ここでは遊びの種類や遊び方という現象よりもその背後にある構造の変化をもたらしている原則の探索に関心があるとの回答があった。315 小島(北大)からの、ここでのスクリプト概念は階層的モデルをもとにしたものかの指摘に対し、まったくその通りであり、schank の「スクリプト」ではなくコンピュータネットワーク化されているものであるとの回答があった。

全体討議においては、312、314、315に対する高橋(国立音大)のサンプルサイズの指摘や、314、315に対する高橋や高木(山大)の研究の射程や変数のおさえ方、モデル化等の指摘がひきがねとなって、ケーススタディ的方法論の在り方や少数事例にもとづくモデル論的アプローチからの一般化の問題をどう考えるかといった、基本的かつ重要な心理学的的方法論について議論がなされた。その中で無藤・内田は、サンプルサイズの適切さは興味の対象や分析の仕方によって決定されるものであり、多ければよいというものではないと指摘する中で少数事例からのモデル論的アプローチを主張した。それに対し高橋や高木はどれ位の範囲の中で問題を考えてモデル作りを行うかが重要ではないかと述べた。研究の方法論としては、ある射程範囲を最初から考慮する中で多くのサンプル数からの平均値データから一般性のある原理原則を見出そうとするアプローチや少数事例からのモデル論的アプローチがあつてよいが、必要なことはどちらの側に立ってアプローチしているかが当の研究者の中に意識されており、各立場の長所・短所を十分理解していることである、といった丸野の発言でこの討論が終った。

最後に311に代表される従前の手法を課題設定型、313~315の新しい手法を multiple trial feedback 型と位置づける中で、従来の方論とこの新しい方法論のメリット・デメリットは何であろうかといった丸野の提案に対し、さまざまな意見が出され、従来の方論の問題点を確認しあった。(丸野俊一)